

国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) 2022 年度第 1 回分科会 (第 17 回ワークショップ) 開催

2022 年 6 月 16 日、国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) の 2022 年度第 1 回分科会 (第 17 回ワークショップ) がオンラインで開催され、参加大学 24 校から 45 名が出席し、1) SDGs カリキュラム、2) 大学評価・アカウンタビリティ、3) 大学間等連携、4) マネジメント、をテーマとする 4 つの分科会が行われました。分科会のアジェンダとしては、1) 本年度の分科会の方向性および各分科会での議論テーマの決定、2) 中間報告に向けた準備、という 2 点があげられました。各分科会の議論概要は次の通りです。

・SDGs カリキュラム分科会

各カリキュラムの更なる向上を図り、学部生向けの共同教育プログラムの試行を目指すという方向性を確認。昨年度開発したオンライン教材「国連 SDGs 入門」を修了証交付プログラムとして運用していくため、その質の管理、運用に関する調整、規定作りを行う SDG-UP アカデミック・コンソーシアム (仮称) を設置したい。構成メンバーはコンテンツ提供大学と国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) の予定。必要があればオンライン教材の動画コンテンツなどの修正を行い、指導方法を含む資料を 8 月中旬までに準備することとする。今後、学部上級科目、大学院レベル科目、英語による開講、高大連携のための科目の検討も行っていきたい。9 月の中間発表会に向けて、次回の分科会では、アカデミック・コンソーシアム設置の進捗と、具体的な新規科目の開発について話し合いたい。

・大学評価・アカウンタビリティ分科会

今年度の方向性としても、THE (Times Higher Education) のインパクトランキングを中心とした大学評価の分析を行い、外部評価を通じた大学の行動変容を促す流れを進めていく。インパクトランキング 2022 では、前年に比較してエントリーする大学が多様化し、高順位にアジアの大学が入ったことが指摘された。日本の順位は北海道大学や京都大学をはじめとして全般的に上がっており、それぞれの目標のスコアも向上。北海道大学は早くから持続可能な社会の推進をかかげた取り組みを行っており、2020 年に就任した寶金総長のリーダーシップによって学内の活動が取りまとめられ、エビデンスに基づくデータを提出しやすくなったことを報告。高順位の海外の大学では報告書のレイアウトにも注力し戦略的な見せ方を工夫している。SDG の目標 17「パートナーシップ」に関して、研究の分野で南北格差も生じており、THE は先進国と途上国の連携の促進を望んでいることが指摘された。9 月までに THE インパクトランキング参加経験に関するアンケートを SDG-UP 参加大学の間で実施し、同ランキングの仕組みに関する日本からの具体的な意見を THE 側

に提出したい。

・大学間等連携分科会

今年度の分科会のテーマは『地域コミュニティとの連携の在り方』とし、持続可能な地域連携の在り方を模索していくという方向性で合意。昨年度を振り返り、自己紹介も兼ねて各大学の事例紹介を行った。多くの大学が地域と連携した独自の活動を展開しており、広報および具体的な発信の強化が必要である。また、ユースの力に着眼し、SDGs に関わる取り組みをしている学生との連携を促進して、彼らの活動内容を集約し発信することも選択肢になり得る。既に SDGs 関連の様々なコンテンツが存在する中で、SDG-UP として協力して発信することの利点を整理し、連携の地域的な特色を活かした発信の方策を考える。

・マネジメント層分科会

サステナビリティを大学経営の焦点とするにあたっての課題や問題点、解決策について意見交換を行い、いかに各大学の行動変容につなげていくか、について議論した。THE インパクトランキング 2022 で総合ランキング世界 10 位（国内 1 位）になった北海道大学からは、理事の具体的な声掛けなどのリーダーシップにより SDGs の達成に対する機運が高まり、学内の教員やスタッフに一体感が生まれたという経験の共有があった。また、サステナビリティ・レポートや環境報告書に力を入れ、既存の各部署の仕事に SDGs を関連付ける試みを行ったことが報告された。9 月の中間報告に向けて、各大学の特色を見つめ直し、地域に根差した強みの開発を考える。また、企業の ESG 投資を活用する可能性も含めて、企業・行政・地域と連携した取り組みを経営と結びつける方法を模索する。

最後に、SDG-UP アドバイザーである村田俊一関西学院大学総合政策部教授が、4 つの分科会における議論について総括しました。「SDGs カリキュラム」については、昨年開発したオンライン教材の管理・運用を担当するコンソーシアムを設立するという画期的な計画のもと、今後さらに理系分野や高度な一般教養を盛り込んでバランスの取れた開発が進むことを期待していると述べました。「大学評価・アカウンタビリティ」に関しては、今回のインパクトランキングで日本の大学の参加が増えて北海道大学が世界で 10 位に入ったということは素晴らしいことであり、その実践からぜひ多くのことを学び、さらなる行動変容につなげたいと話しました。「大学間等連携」では、それぞれの大学の特色を見つめなおして強みを確認していくとともに、学生の意見にも耳を傾け、活動内容を集約し連携を促進していくことが重要であると述べました。「マネジメント層」に関しては、SDGs の達成に向けて、各大学のマネジメント層がグローバル・スタンダードにも注意を払うようになってきたことを指摘しました。そして、マネジメントを刺激し行動変容を起こしていくプロセスには時間がかかるけれども、学生や教職員の積極的な参加のもと、一度動き出せば必ず良い方向に進んで行くので努力を続けていきたいと強調しました。

参加大学 24 校（アルファベット順）

愛媛大学

広島大学

北海道大学

国際基督教大学

国際大学

金沢大学

慶應義塾大学

関西学院大学

ノートルダム清心女子大学

お茶の水女子大学

岡山大学

沖縄科学技術大学院大学

大阪医科薬科大学

大阪公立大学

大阪大学

龍谷大学

創価大学

上智大学

東京都市大学

東京工業大学

東洋大学

北九州市立大学

東京大学

筑波大学